
魔女の小さな森

葉琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の小さな森

【Zコード】

Z0728Z

【作者名】

葉琉

【あらすじ】

森の中にある店には、変わり者の魔女が住んでいる。彼女が店で扱っているのは、役に立つ薬から得体のしれない品物まで様々。そこに家政婦を兼ねた店番として住み込むことになつたごく普通の女性と、店主である魔女、そして、不思議でおかしな客たちとの、どこの日常から外れた物語。一話読み切りになつています。

1・あめ

その店は、村に近い森の中についた。

比較的穏やかな獣や、大人しい魔獸しかいないため、子供たちの遊び場になつてゐるその森に、いつ頃その店が出来たのかは、わからない。

村で一番の年寄りも、自分の祖母が生まれた時にはもうあつたと言つ。

今の店主が村にやつてきたのは20年も前のことだが、それまでには、違う女性が店にいた。

その女性以前は、若い夫婦だったらしいが、彼女らの代替わりがどうやって行われ、どういう理由があつて次の店主に選ばれるのかも、誰も知らない。

ただ、扱うものはいつも同じで、役に立つ薬草から、得体の知れない薬や物まで様々で、必ず店主は魔女なのである。それだけはずつと変わらない。

そして、現在そこに住んでいるのは、店主である魔女と、近くの村出身の女性一人きりだった。

しばらく雨が続いている。

どこか湿り気をあびた店内を眺めながら、店番を兼ねてこの家に住んでいる多紀は、溜息をついた。

時期とはいえ、こう雨が続くと、建てられた年代もわからぬくらい古い店舗兼住居である建物は、あちこちで困った事態になる。例えば、湿気で扉がうまく開かなかつたり、普段使わない部屋で雨漏りがしたり、部屋の椅子や敷物がかび臭くなつたり、などである。

掃除はこまめにしてこるし、空氣もなるべく入れ換えるよつとする。

てこるが、どうもならないこともあって、店と住居部分の管理を任せられている身には憂鬱な時期なのだ。

客足も鈍るが、それでも、雨の日が続くと、やがてくる客もいる。その客の日当ては、森の中で採れる石だ。

晴れた日には他の石と同じにしか見えないが、雨が降り、水を蓄えると独特的の光を放つ。魔女だけでなく魔法使いと呼ばれる人々から、魔力の宿るそれは重宝されており、好んで装飾品に使ったり、砕いて一般の人向けのお守りを作ることもあった。

この森には、その良質の石が多数存在している。

森の所有権を主張する店主は、それを結構な高値で売りさばいていた。そのため、魔女は石探しには比較的熱心なのだ。

多紀は、窓の外を眺める。

前回来たの日から数えても、そろそろ『常連』が訪れてもいい時期だった。

そう思つて、暇潰しに拡げていた雑誌を閉じる。

時刻はちょうど、お昼の少し前。

朝の弱い魔女も起きてくるだろう。そう考えて立ち上がりかけた時だった。

重い扉がゆっくりと開き、風と雨が室内に吹き込んでくる。

客が来たことが分かるように取り付けられた小さな鈴の音も、今

日は風に吹き消され、聞こえない。

それでも、扉が開いて入つてくるのは『客』とわかつてしているので、愛想笑いを浮かべつつ、多紀は顔を上げる。

「いらっしゃいませ」

いつものように声をかけるが、開いたままの扉の向こうから、雨の雫だけでなく木の枝や葉が舞い込んできて、思わず動きを止めてしまう。

それに気が付いたのか、外にいた男が慌てて中に飛び込み、扉を閉めた。

「悪い、汚しちまつたか」

申し訳なさそうに謝った男は、扉の前から動かずに対面して立っていた。

着ている外套はびしょ濡れで、そこから垂れた水滴が床を塗らすことを感じているのかもしれない。

「お気になさらず。魔女の部屋の惨状に比べたら、そんな水滴や風で飛んできた木の葉なんて、かわいいものです」

「雲さん、相変わらずだなあ」

店主の名前を口にすると、男は笑う。

この店舗兼住宅の主は、散らかすことは得意だが、片付けるのは苦手という困った性分なのである。多紀が何度も部屋を片付けても、嫌がられるくらい文句を言つても、面倒の一言で終わらせてしまう。住居の様子は客には教えていないが、雲がこちらへ来るとときは、だらりと服を着崩していたり、髪が跳ねていたり、どこに物を置いたがわからなくなつたと言つては、多紀に怒られているので、客も大体の様子を察しているのだろう。

「いつもの、あれでいいんですね？」

男の脱いだ外套を受け取りながら多紀が問いかけると、ああ、と彼は言つた。

「どうしても、こここの森のじゃないとダメつていうからか、困つたような顔をしても、どこか男は嬉しそうだ。

「用意してあります」

「さすがだね」

面倒、眠いが口癖の魔女だが、金払いのいい客に対しては重い腰も簡単に上げる。

そろそろこの男が来るころだと、ふつぶつと文句を言つつつも、魔女は昨日森の中へ出かけていったのだ。

「今回の石は、上物だつて言つていましたよ」

外套をかけた後、男に椅子を勧めると、多紀は用意していた袋を手渡す。

確認のために、男は中身を見るが、小さく肩を竦めて首を振った。

「やつぱり、どこがどうす「」のか、わからない」

男の言いように、多紀も笑う。

そうなのだ。この石は、魔力を持たない者が見ても、小汚いただの石だ。当然、多紀にもそこらに「」している石と同じにしか見えない。

「私もですよ。だから、うつかり捨ててしまわないように気をつけているんです」

拾つてきたものを所定の位置に零が置いてくれないので、大事なものが行方不明になるたびに、家の中を歩いて探し回るのは多紀だ。それほど広くはないし、零の大体の癖を把握してしまった今では、どこらへんに何を置き忘れるかなどわかつていて、ここへ来た当初は失敗もよくしたものだ。

「でも、零さんが見つけたものは、いつも品質が良いつて、誉める。この森の状態もいいんだろうなって。俺たちがいる場所は、あんまり良い感じの場所じゃないしな」

男の顔は、話しながら、段々と緩んでくる。

頭の中には、この石を欲しがっている相手　　魔女なのだが、

その姿が浮かんでいるのだろう。

零が言うのだから、どこまで本当かはわからないが、この男は、魔女に惚れて、その彼女を振り向かせようと、熱心に贈り物やらなにやらを渡しているらしいのである。零の扱う石も、どこで聞きつけたのか自分の惚れた魔女が欲しがっていることを知つて、わざわざ隣国から買いに来ているのだ。

零のように主を持たない魔女は自由気ままに生きているが、男の思い人は、生まれた時から仕えている主がいて、他国にはほとんど出られない。だから、代わりに俺が、ということらしいが、その熱心さと根性には、頭が下がる。

もつとも、零に言わせれば、魔女は変わり者が多いし、恋愛に関しては淡白なので、そのくらいしても振られることがほとんどだしい。

それでも諦めない男に、零は、どこまであの根性が続くのかが気になるらしく、密かに男の来店を楽しみにしているようだった。案の定、多紀と男が話している声が聞こえていたのだろう。

「相変わらず、骨抜きだねえ」

店と住居を隔てる扉が開き、中から中年の女が出てきた。いつもとは違い、少しだけちゃんとした格好 といつても、一步間違えれば寝間着と間違えられそうな着方ではあるが、零にしては上出来な姿をしている。

髪もちちゃんと梳かした状態だ。

「魔女なんかに惚れて骨抜きにされちまうなんて、どうかしているよ」

いつもと同じように、皮肉なんだか、面白がっているのかわからぬ言葉を、男に投げかけた。

しかし、男の方は、気にしていない。反対に、骨抜きなのは確かだなどと、呑気に言っている。

「まったく、嫌味も通じないとはね。とにかく、いい返事はもうええそうかい？」

「どうかな。でも、笑ってくれるようになつた」

彼の思い人の魔女は、無愛想で、あまり笑わないといつ。今日の前にいる魔女とは大違のだ。

「それに、名前を呼んでくれるようになつたし」

きちんとしていればそれなりに整った顔をしているのに、『でれでれ』という言葉がぴったりの表情を浮かべて居たため、全部白無しだ。

零はそれを見て、笑いをかみ殺している。

「おまけに、次の休みに口に、部屋に招かれた」

男ににやにや笑いは止まらない。さつきよつもひどくなっている。

「惚気はそこまで。耳がおかしくなるよ」

棚においてあつた煙草に手を伸ばすと、零はわざとらしく溜息をつく。

零の気持ちは、多紀もわかる。

来る度、惚気話はどんどんふくれあがっていくのだ。

それでも多岐が黙つて聞いているのは、男が本当に嬉しそうだからなのかもしれないし、こんなに愛されている魔女というのに興味があるせいかもしれない。

多紀が唯一知っている魔女は零だから、様子もまるで違う魔女がいるのだと思うだけで不思議な気分になるのだ。

世の中の魔女には変わり者も多いと言うが、男から聞く件の魔女は、変わつてはいるが、零とは違うおもしろさを持つてているような気がしている。

「また、来る」

そう言って、嬉しそうに帰つていった人が、再び訪れることはなかつた。

魔女の手をとつて、一人で逃げたと聞いたのは、季節を越えた頃だろうか。

「どうしようもないね」

そう言って零は笑つていたが、念願かなつて魔女を手に入れた男に対しても、悪い感情は持つていないのである。

そうでなければ、彼女が、言われる前に石を探しに森をうろついたり、客の相手をするために、店へ顔を出すことはない。

「幸せになれるといいですね」

多紀が言つと、零はなれるさと自信たつぱりに答える。

「なにしろ、根性で魔女を口説き落とした男だよ」

「いいなあ、私にもそういういい男が現れないでしょうか」

「むりむり。こんな森の奥で、魔女と暮らしている限り、いい男なんて現れたりしないよ」

「ですよね」

やつてくるのは、得体の知れない相手ばかりだ。

その中の、たまにいる『男』は、すでに相手がいるか、何か裏がある者ばかりなのである。

あまり、恋愛方面でお近づきにはなりたくない。

かといって、多紀の幼馴染みの男達はほとんど結婚してしまっていりし、年の近い知り合いの男性もいない。このままでは出会いがないまま行き遅れ人生まつしぐらなのは間違いなかつた。

だから、あんなふうに純粹に思いをぶつけられた魔女のことば、少しだけ羨ましくもある。

「ほどぼりが覚めた頃、一人で店を覗くと言つていたよ。あの魔女は、この森に興味があるようだからね。自分の手で石を探つてみたいんだとさ」

「本当ですか？ 私、楽しみにします」

男がベタ惚れだという魔女に会つてみたとい、多紀は思つていたから、その約束は嬉しい。

雲が吐き出した紫煙が、静かに立ち上つていぐ。
少し籠もつた空氣を入れ換えようと、多紀は窓を開けた。
窓から見えるわざかな空を、雲が厚く覆つてゐるのが見える。
また、雨がしばらく続くのかもしれない。
もし、一人がやつてくるとしたら、やはり雨の日なのだろうか。
いつか叶えられるかもしれない約束を思いながら、多紀は今にも降り出しそうな空を見上げた。

『糸車を無くしてしまったのです』

その客は、細く長い指先でゆっくりと髪をかき上げながら、そう言った。

あらわになつた首も細い。

きつと、服に隠れて見えないところも、細いのだろう。

「それは、つまり、糸車を探してほしい」ということでしょうか?」

一応ここは魔女の店だ。

物は売るが、探し物をするのではない。だいたい、そんな面倒なことを、主である零がするはずもない。

『いえ、どこで無くしてしまったのかは、わかっています』

悲しげに俯いた客の目から、ぽろりと涙がこぼれた。

奇麗な透明の水滴は、頬を滑り落ち、客の白い服に染みを作る。その染みは、やがて青黒く変色し、服に穴を開けた。

ああ、やはり、と多紀は思つ。

入ってきた時から、おかしいなと思っていたが、目の前で泣いているのは、人ではない。

魔女の店に魔物の類が来るのはめずらしいが、ないわけではないので、驚かないが。

『申し訳ありません。糸車を無くして以来、力の制御が上手くできないのです』

自身が流した涙が服を駄目にしたことに、気が付いたのだろう。客はそっと涙を拭うと、深々と頭を下げた。

『魔女ならば、わたくしを人のように見せる薬を作れないと想いまして』

『人によつて見せる薬、ですか』

繰り返しながら、果たしてそういう薬を作ることは可能なのだろう

うかと考える。ここに住み込んで数年。魔女である霧から、そんな薬の話を聞いたことはなかつた。

だが、ないとは言えない。彼女が知らないだけで、存在するのかもしれないのだから。

「どうにしても、霧に聞くことが先だわ。」

「店主に確認してまいります。少し待つだけですか？」

「うん」と、はいと答えて密はゆつくりと頭を下げる。

起きあぐだわこと寝台の中の店主を揺さぶると、布団の中からうるさいねえとくぐもつた声が聞こえた。

「ちやんと起きてゐよ。あんまり気持ち悪いな気がただよつていたから、出でこくのが嫌だつたのさ」

面倒そうに起き上がり、傍らにある煙草に手を伸ばしたのを見て、多紀が皿を吊り上げる。

「寝台の上での煙草は禁止つて、何度も言つてゐるじゃないですか」強引に煙草を取り上げられ、霧が不服そうな顔をした。

「私の家なのに……」

そうぶつぶつ言しながらも、霧は寝台から下りる。そのままの格好で出て行こうとするのを見て、多紀が慌てて服を引つ張つた。

「着替えくらいしてくださこ」

「はこはこはこ」

「返事は一回で……」

多紀が手伝つて、とこりよりも、多紀にされるがままに服を着て髪を整えられ、準備が終わつた時には、霧は『ああ面倒』をすでに5回も口にしていた。

「あれだけ瘴氣をまき散らしているんだからねえ。絶対面倒事だつて思つたんだよ。ぐずぐずしないで、逃げちまえばよかつた。……

とにかく、多紀、あんたちゃんと瘴気除けのお守りを持っているだるうね」

「当然です。この若さで私、まだ死にたくないです」

魔女ならともかく、何の力もない多紀が、魔物相手に真正面から

向き合つて話が出来るわけがない。

しかも、相手は、まったく力を制御できず魔物の特徴でもある瘴気が漏れまくりな状態なのだ。

「よし。ならば、会いに行こうじゃないか」

面倒だといいながら、どこか面白そうにも見える雫の後ろをついて歩きながら、多紀は急いで先ほど魔物が言つたことを伝えた。

「詳しい理由を聞こうじゃないか」

「雫がそう言つと、椅子に座っていた魔物は、おずおずと顔を上げた。

「どうして、人間に見せかけたいなんて思つたんだい？ 糸車を無くしたと言つていたけれど、それが関係あること？」

『無くした糸車を拾つたのが、魔法使いだからです。そして、彼はそれ持ち帰り、自分のものにしてしまいました』

「それは災難だつたね。魔物の持ち物は、使いようによつては、魔法使いの益になるからね。欲しがる奴はいくらでもいる」

魔女と呼ばれる人間は、生まれた時から持つてゐる魔力の量は決まつてゐるが、魔法使いの力は生まれつきのものではない。才能ももちろん必要だが、膨大な知識と努力があつて初めて使える力なのだ。

だが、中には真つ当な方法ではなく、簡単な方法で力を手にしようとするものもいる。

例えば、魔物の持ち物や、体の一部は、それ自体に魔力を有していることが多いので、足りない力を補うことも可能だ。故に、わざわざ魔物を狩るをする魔法使いもいる。

もちろん、その行為は誉められたことではないし、場合によつては魔力に飲まれ、自らを破滅させることになる。正式な魔法使い

たちの間では、表向きはよくないこととされていいるくらいだ。

『わたくしは、魔物としては中級程度の力しか持っていないのです。両親から受け継いだ糸車が無ければ瘴気をうまく押さえることもできぬ。最初は自力で取り返そうとしましたが、屋敷の外には魔物を退ける結界があるため入れないし、魔法使いが外に出たときを狙つても、気配でわかるのか、いつも逃げられてしまつて』

『だから、魔物の気配をうまく消して、魔法使いに近づきたいと?』

『はい』

「しかし、うまく人間に化けたとして、そつづまくいくと思つているのかい?」

『人をたぶらかす方法なら、幾つも知つております故』

それまでおどおどしていたはずの魔物は、唇を釣りあげて笑つた。深い藍色の瞳が露わになり、怪しげな光を放つたのをみて、思わず多紀は手首の腕輪に視線を落とした。この腕輪は、雫特製の瘴気や魔力から身を守る守護がかけられたものだ。雫の腕は信じているが、相手の力が強ければ、完全に防ぎきることができない場合もある。

田の前の魔物は、自ら力は中級程度と言つてゐるが、やはり彼らの目からは、魔女や魔法使いと違つ得体の知れない力を感じてしまうのだ。

よく魔物と出会つて魅了されたという話を聞くが、そのどれもが相手の魔力が強いわけではないということを多紀は知つてゐる。

それほど、魔物が人を魅了する力は特殊なのだ。

『あんまりうちの店員を脅かさないでくれよ』

身を強張らせていた多紀に気が付いた雫が、やんわりとそう口にする。

『ああ、申し訳ありません。うつかりしておりました』

その言葉とともに、魔物の田が自分から逸らされた気配がしたので、多紀は恐る恐る顔をあげる。

そこには再び田を伏せて悲しそうにうなだれる魔物の姿があつた。

「その依頼、引き受けてもいい。そうだね、報酬は、あんたが取り戻した糸車で紡いだ糸 つていうのは、どうだい？」

『そんなものでよろしいのですか』

「あんたにとつては、そんなものでも、魔女にとつては、ありがたいものなのさ」

雫は嬉しそうだが、多紀には魔物が紡ぐ糸がどれほどの価値があるのかはわからない。雫が扱うものの殆どがよくわからないものばかりだが、糸というくらいだからそれをつかつて布を作る程度のことしか思いつかないので。もちろん、それは糸が多紀が思う『糸』と同じという前提があつてのことなのだ。

「三日後において」

その時までに、望むものを作つておいてあげるよと言ひ雫に、魔物はまた深々と頭を下げた。

「さあ、多紀。あんたの髪をよこしな」

魔物が出て行つた後、雫が発した言葉に多紀は首を傾げる。妙な行動や発言が多いとはい、意味のないこととはしない雫だ。その彼女が言うのだから、魔物の欲しがる薬に、何か関係があるのだろう。

そう思うのだが、目の前で嬉しそうに笑い右手を差し出す雫に、うさん臭さを感じるのは、気のせいではないはずだ。

「魔力の欠片もない人間の髪を使って、ちょっとした薬を作ろうかと思つてね」

後ずさつた多紀に、彼女の不安を察したのだろう。一応手だけは引っ込めて、説明をする。

「違う薬の応用なんだけどね、試してみたい方法があつて」
雫が言つように、多紀には魔力はない。多紀だけではなく、この地に住む殆どの人間には、そんな力は存在しない。

数少ない魔女は別として、何百人に一人くらいしかいない魔法使

いでも、最初持つている魔力は小さいのだ。

「私じゃないと、駄目なんですか」

「いや。誰でもいいんだけどね。村にいって髪をくれって言つたら、ただの変質者じゃないか」

すでに村での評価は変人だということは知つてゐるはずだが、そのあたりはいいらしい。

「それに、どのくらいの量が必要かわからないんだ。いちいち貰いにいくのは面倒だろう」

まさか髪の毛全部をむしりとる気なのかと、ため息をつきたくない。さすがにそこまではしないと信じたいが。

「使うのなら、給料に上乗せしてください。それなら、いいです。でも、それって後から何か害が出たりしないですね」

多紀にとつて、魔物はわからない存在だ。生態や種族など、霊の元で働くようになつて昔よりは詳しくなつたが、彼らの考え方や行動は、理解できない。

そんな彼らに自分の髪が入つた薬を使われるのは怖い。

「大丈夫。一応制限はつけるし、無理やり作る薬だ。持続性もないはず」

「ほんとですか。霊さんの大丈夫は結構あてにならないですよ」思えばそれで、何度かひどい目にあつた。

「よくわかつてるじゃないか。さすが付き合いが長いだけあるね」

「ふんぞりかえつて、言わないでください」

確かに付き合いは長い。

森に一番近い村で育つた多紀にとつて、ここは遊び場でもあつた。幼馴染みたちと一緒に、探検しつくした森なのだ。魔女にいたずらしたことも、魔女からお菓子をこちそうになつたこともある。

気まぐれで、面倒臭がりで、寝てばかりいるけれど、嫌いになれないのは、文句をいいつつも相手をしてくれた思い出があるからかもしれない。

「ほんとに何があつたら、責任とつてもらいますからね」

多紀がそう言つと、その時は一生面倒くらに見るよと「冗談めかして笑われた。

「それに、実際作れるかどうかもわからない代物さ」

そう肩をすくめてみせる零は、おもちゃを『えられた子供のようにも見えた。

結局のところ、彼女は薬を作ることが楽しいのだ。

失敗すれば、悪かつたと客に謝るだろうし、成功すれば未練のひとつも残さずに、それを客に渡すだろう。

自分の評判がどうであろうとも、気にしない人なのだ。

それが、魔女といつものなのか、それとも零がそういう性格なのか。

多紀にはわからないが、変人だと言われながらも、村の人たちに受け入れられているのは、そのせいなのかもしない。

『約束通り、やってまいりました。薬はできていますでしょうか』
訪れた魔物は、多紀の姿を見るなりそう言つた。

三日前よりも、さらになにもかもが薄く細くなっている気がする。そのまま消えてしまいそうでもあった。

「薬の効用は一時的なもの。せいぜい一日程度だ。今のあなたの体力と魔力では、失敗するかもしれない。それでもいいなら、持つていきな」

零の言葉に、魔物は卓上に置かれた薄墨色の丸薬をじっと見つめていた。

やがて、細く白い指先がそれに触れ、転がし、確かめるように手に取つたあと、ゆっくりと頷いた。

「いただきます」

その藍色の目に強い決意を宿し、魔物はそう告げた。

うまく行つたかどうかは、いつのまにか届いた大量の糸が教えてくれた。

引っ張つても切れない透明で細い糸は、何かを連想させるものだつたが、多紀は気にしないことにした。

その糸を零が何に使つたかは、また別の話である。

3・うつへしい

そこは、どこにでもある小さな森だった。

強い魔物の気配も、大型の肉食獣の気配もなく、人の手が入ったことがわかる程度に下刈りされ、木々が口を遮らないように、細い道の上の枝は切られている。

人の出入りがあるのは間違いない。

ならば、すぐに誰かに見つかってしまうのだろうか。

女は、木にもたれかかるようにして座り込んだまま、そんなことを考えていた。

迷い込んだ知らない人間に、どんな反応を返すだろう。

ここへ来る前に見た近くの村は、小さいながらも活気があった。それなりに若者もいたし、広場では子供たちが駆け回っていたようだ。

田を閉じると、風に揺れる木々のざわめきが聞こえ、水の匂いもする。

穏やかで、心地よい森だから、村人がこの森へ来るならば、それはさほど先のことでもないだろう。ここに素性の知れない女がいれば、警戒されるだろうし、もしかすると追い出されるかもしれない。それでも、動きたくないと思うのは、行く当たがないからだけではなく、居心地がいいせいだ。

このまま、この場所で朽ちていくのもいいかもしれない。

そう思つて、再び物思いに沈みかけたとき、足音に気がついた。しめつた地面に積もつた葉がこするようなその音は、軽い。思つていたよりも、見つかるのは早かつたようだ。

村人が、それとも音からして、子供か。

確かに近付いてくる足音の方向を見ると、確かにそこには人がいた。

だが、予想に反して、立ち止まつてこちらを見ているのは、小柄

な老婆だ。

綺麗に纏められた白髪に、暖かそうな上着を羽織つている姿は、普通の村人に見える。

だが、榛色の瞳は、こちらを直踏みするかのように鋭い。

「ああ、彼女は魔女だ。」

本能が、そう告げる。

同じ匂いだ。懐かしくもあり、忌わしくもある同族の氣配を投げやりな気持ちで見つめる。

「魔女だね」

見た目よりも若々しい声で、問い合わせられた。

「どうして、こんなところにいるの。主をなくしでもした?」

答えずにただ見つめ返していると、年老いた魔女はため息をついた。

「答えたくないなら答えなくてもいいけれど、私の大事な森で倒れられるのは迷惑よ」

あなたの森、と口の中で繰り返す。

「ここは、あなたの住処?」

かすれた声で尋ねると、老婆は笑った。

「そう。住まわせてもらつているわ」

「……一人で?」

暗に仕えるべき相手はいないのかとの意味をこめる。そのことが相手に伝わったのか、老婆は、そうだと答え笑つた。

「強いて言えば、この森そのものが私の主でもあるわ。ここで暮らし、森を穏やかにし、ここで私は死ぬ」

歌うよつこ、老婆は言葉を紡ぐ。

それに呼応するよつこ、木々がざわめき、風が吹いた。

老婆は森に愛されている。

不思議なことに、感覚として、そのことがわかる わかつてしまつ。

同時に感じたのは羨ましいという気持ちだ。

この森は美しい。優しく穏やかで、魔女の心さえも癒す。

それとも、目の前にいる魔女が穏やかな雰囲気を纏っているからこそ、森は美しいのだろうか。

見回すと、木々の間からこぼれる光が、柔らかく辺りを照らし、等しく老婆にも自分にも降り注いでいた。

「奇麗」

そう呟くと、老婆は優しい笑みを浮かべる。

「美しいでしよう? この森は、ずっと魔女が守ってきた。私が何人目の魔女かはわからないけれど

魔女が守る森。

その言葉に、女の口から溜息が漏れた。

だからこそ、こんなにつづくしいのだろうか。

なにもかもなくしてしまい、見ている全ては味気ないものだったはずなのに、この風景の中にずっと埋もれていたいと思つのは、魔女が関わる森だからなのかな。

そして、自身の田から、涙がこぼれているのは、何故なのだろう。

「馬鹿な子だね」

近付いてきた老婆に頭を撫でられ、その行為そのものが初めてのことだと知る。今まで、彼女に必要以上に触れたものはいなかつた。母親も父親も、生まれたときにはいなかつたから、抱きしめられた記憶もない。主は、あくまで女にとつては従うべきものであつたら、やはり近くにあつても互いに触れ合うことなどなかつた。『魔女』として暮らしていた屋敷でも、使用人たちとは、彼女に対してはよそよそしく接し、こちらが話しかけなければ、近付くことも無かつたように思う。

ならば、年老いた魔女が自分に触れるのは、同族であるという理由からなのだろうか。ほとんど隔離された生活を送っていた女は、他の魔女に会うのも初めてだつたから、本当はどうなのかさえ、わからない。

「ずっと、一人だったの?」

「主は、いた」

「そう。それでも一人きりだつたのね」心が、という言葉に、何かがすとんと落ちたような気がした。

そうだ。確かに、主はいたけれど、いつも孤独だった。

「名前は？」

「雲」

そう答えると、いい名前だと讃められた。

唯一、主が自分にくれたものだ。好きではなかつたが、それでも、育ててくれた人だ。魔女の自分を必要だといつてくれた唯一の人。その家を出たのは、主が死んで、彼の後を継いだ息子を、どうしても新たな主として認められなかつたからだ。

自分にとつて、仕えるべき相手は、あの人であつて息子ではない。ましてや、魔女などいらないといった男の側に、彼女の居場所は存在しなくなつた。

「行く場所が定まるまで、ここにいればいいわ」

老婆の言葉に、雲は目を瞬かせる。

「いいの？」

「ここに迷いこんだのも、何かの縁。私も一人でいるのには飽きたところだし、後継者も必要なよ」

「後継者？」

「そう。ここには魔女の森。私も、もうそれほど長くはない。だつたら、誰かが引き継がなければならぬでしょ？」

茶目っ氣たつぶりに片目を閉じると、老婆は手を差し伸べ、雲の手を取る。

「でも、私が引き継ぐとは限らない」

躊躇う気持ちが、老婆の手を拒みそうになる。

「別に、今すぐどうするか決める必要はないわ。私、ここでちょっとした店もやつているのよ。それを手伝ってくれるだけでもいいから。年をとつて、力仕事も辛いのよねえ」

そんなふうに言われて、ほんの少しの間なら、と結局雲は手を引

かれるままに、立ち上がった。

ほんの、短い間。

ちょっとだけ、この美しい森で暮らしてみてもいい。

どうせ、行く当てなどないのだから。

最初はそんな気持ちだったはずなのに、結局、女は小さな森の不思議な店に、ずっと住み続けることになった。

絵描きが村に来ているんだってや。

「そう意味ありげに懇意に言われ、商品整理をしていた多紀は、手を止めた。

普段のこの時間なら、零はまだ寝台の中のはずなのに、わざわざ店の方までやってきて、何を言ひ出すのか、と思つたからだ。

「何か企んでいます?」

声にやや不信感を忍ばせて、多紀は零の反応を伺う。

いつもと同じようにやにや笑いに、煙草。着崩した服は相変わらずよれよれで、普段と様子は変わらない。

だからといって、何か企んでいないと言いつ切れないのが、零だ。

「いやだねえ、多紀。雇い主を疑うなんてさ」

それならば、もう少し真面目な顔と格好をすればいいのだ。そんな胡散臭い顔で言われれば、警戒するのは当然である。

「自分の普段の行動を顧みてから、言つてください」

「欲望に忠実に生きているだけだ」

自慢にもならないことを堂々と言われて、多紀は呆れるしかない。いつものことだが、こうやつて多紀をからかって、なかなか本題に入らないのも、零の悪い癖だ。

「とりあえず、私、絵描きは嫌いです」

さつぱり言つて、商品整理に戻るうとした多紀の服を零がひつぱる。

「おや、そうなのかい? 絵描きなんて、会つたことも見たこともないはずだよ」

痛いところをつかれ、多紀が押し黙る。

恨みがましい田舎しなのは、零が言おうとしていることをなんとなく察しているからだ。

「それとも、絵描きになろううつて奴に知りあいでもいるのかい？」

「知りません」

「とにかくせ、その絵描きに頼まれたんだよ。村まで届けてほしいんだってさ」

「……何ですか」

「剣」

「絵描きなのに？」

「ああ、絵描きなににさ」

言いながら、零は細長い袋を多紀に見せた。膨らみ具合から、恐らくそれが零に言う剣なのだろう。

「この剣に、ちょっとした魔物避けの魔法をかけて欲しいって頼まれたのさ」

薬や得体の知れないものばかり扱う店ではあるが、ここやつて持ち物に護符の効果のある魔法をかけて欲しいと依頼してくるものもいるのだ。労力が低い割には、金を取れるので、零はよく依頼を受ける。

それ自体は珍しくはないのだが、問題は、いつ零はこの剣を預かったのだろう。

店番をしているのは多紀だが、ここ最近、客は一人もこなかつた。零が村へ出掛けていらないのも知っている。

それとも、多紀が知らない間にこいつそり外に出たというのだろうか。

これが一番可能性がありそうだつた。

「一昨日、夜中にちょっと森をうろついていたら、自称絵描きにばつたり会つたんだよ」

まるで多紀の心の内を読んだかのように、零は言った。

彼女は時々、ふらりと森の中へと足を踏み入れることがある。特に予定があつての行動ではないので、多紀もその全てを把握していなかつた。

「夜中に剣を持つて彷徨いている絵かきから依頼を受けるなんて、

何考てるんですか。変な人だつたら、どうするんですか」

比較的安全な森とはいえ、時には妙なものもやつてくる場所だ。魔物程度なら、魔女である零には害もないだろうが、悪意のある人間がこないとは言えない。昔に比べて平和になつたとはいえ、夜盗の類がいなくなつたわけではないのだ。

「いや、だつて困つてたからさ」

「困るつて、何を？　まさか、こんな小さな森の中で迷子とか、そんな馬鹿なこと」

「それが、あつたんだよ」

小さな子供でも迷わないこの森で迷子？

頭を抱えそうになつた多紀に追い打ちをかけるように、零の言葉は続く。

「なんでも、月に照らされた森を絵にしたくて歩いてこる「ひら」、わけがわからなくなつたんだとか。ほんのちょっと右に歩けば、森の外だつたのに、妙な男だよ」

「やつですか」

やる気も聞く氣もない多紀の手は、商品の方へと伸びている。やりかけの片付けを目前までには終わらせてしまいたいのだ。それなのに、零はさらに多紀の衣服をひっぱって、こちらへ視線を向けさせようとしている。

「で、話をしこるうちに、意氣投合してさ。私が魔女だつてことがわかると、守護の魔法をかけてほしいとか言つてきたんだけど、その流れで、うちに店番がいるつて話をしたら

「勝手にそんなこと教えないでください」

「もしかしたら、多紀が知り合いかもつて話になつてさ」

「は？」

今度こそ、完全に、多紀の手が止まつた。

大きく見開かれた目は、驚きといつよりも、嫌な予感がするという気持ちを映している。

「だからさ、言つたのさ。だつたら、剣に魔法をかけ終わつたら、

あんたのところに店番を使いにやるよつてね
ひどく楽しそうな零に、多紀は溜息とともに、信じられないと呟いた。

抱えた剣は、とても重かつた。

当然だ。多紀は小柄な方ではなかつたが、普段から大きな剣など持たない。せいぜい短剣だ。斧なら持つこともあるし、それだつてそれなりに重いものだが、やはり『剣』というだけあつて、どこか恐い気がする。この森で生活するようになつてからは遠ざかつていたが、まだ街の屋敷で働いていたころ、それを奮うのを見る機会は何度もあつた。

血を流して倒れる姿は見ていて気持ちのいいものではないし、倒れた人間を見て、腰を抜かしたこともある。喧嘩のあげく剣を振り回した人間も街では珍しくなかつたのだ。

けれど、決してそれを見慣れるということはなかつた。

きれい事だと分かつていても、森で獣を狩るのとは違う、ただ傷つけ合うだけに使われる剣は、どうしても好きになれない。

それでも、腕に抱える剣に嫌悪感だけでなく、仄かに暖かいと思う気がするのは、零がかけた守護魔法のせいだろうか。

人の命を奪うためではなく、持ち主を守るという目的でかけられた力は、この森の気配と同じく優しい。

ただ。

気になるのは、この剣の持ち主であるという自称絵描きである。自分を知つてゐるかもしだいという相手。

変なところで迷子になつたり、絵描きのくせに剣を持つてしたり。そんな人間に、心当たりがないわけではない。思い出の中にしまい込んで、すっかり忘れていたが、そういうことを言いそうな相手をたつた一人だけ知つてゐるのだ。

思えば、その人物には零同様、振り回された記憶しかない。

いつだつて勝手に多紀に関わってきて、飽きたら他の人間に意識を向けてしまう。一度と会うことはないと思ったから、全部忘れてなかつたことにしてしまつたのに。

今更、また関わりを持たれるなど、『冗談ではない。だから、願う。

どうか、自分の知り合いでありますように」と。似たような性質の別の人間でありますように」と。だが、その期待は、村の広場に立つてゐる背の高い男の姿を見つけたときに、脆くも崩れ去つてしまつた。

「あー、やっぱり多紀」

こちらに気が付き、そういうて笑つたのは、確かに見覚えのある顔。

かつて、同じ屋敷で働き、そこの主人が借金を抱えて奉公人たちを解雇したとき、一緒に路頭に迷つた相手だ。

俺は絵描きになると宣言して街を飛び出して以来、一度も会つていない。

あの時は、多紀を含め周りの人間が皆、絵描きなど無謀だと止めたけれども、聞かなかつた。

「……久しぶり」

外に言うべき言葉も見つからず、多紀はそう口にする。

「ほんと、久しぶりだよな。魔女が話す店番が、なんとなく多紀に似てるからさ。もしかしてつて思つたんだ。前に、このあたりの出身だつて言つていたし」

「奉公先を紹介してくれたのが、魔女だつたんだよ」

そのことに責任を感じたのか、単に魔窟となりかけた我が家をどうにかしたかったのか、奉公先を失つて途方にくれる多紀に、どうせ暇なら手伝えと声をかけてきたのが雰だつたのだ。

「そういうあんたは、どうなの。うちの雇い主は、あんたは絵描きつて名乗つたつて言つていたけれど」

「え、ちゃんと絵描きだよ。一応、俺の絵を気に入つて、買つてくれ

れるような相手もいるんだ。とはいっても、まだまだ駆け出しだから、絵だけでは食べていけなくて、傭兵まがいのことや、商隊の護衛をしてる

「

だから、剣なのか。

実用的な剣の重さに納得できた気がした。

彼は、多紀がいた屋敷でも、主人の護衛として働いていたのだ。幼い頃両親を亡くし、叔父である傭兵に育てられたと言う彼は、剣の腕は確かで、人懐っこい性格から主人にも気に入られていた。誰にでも優しくて、誰にでも愛想よくて、結局誰も選ばず、一人きりで行ってしまった男だ。当時、彼に焦がれて、叶わなかつた女性を何人か知つていて、彼の旅についていこうとした者もいたようだけれど、その誰もが置いて行かれてしまった。

そのことを、男は知つているのだろうか。

「これ、魔女から」

そう言つて剣を渡しながら、本当は知つていたのではないかとも思う。

結局のところ、誰にも本心は見せなかつたし、一番深いところでは、誰も立ち入らせなかつた。自分に対する好意に対し鈍感なふりをしていたことも、多紀は知つている。

結局、どんなに願つても、きっと彼は一人で行くことを選ぶのだろう。置いていかれる方の気持ちなんて、おかまいなしなのだ。屋敷内で、年が近いという理由でそれなりに親しかつたはずの自分にも、たつた今まで連絡ひとつなかつたのだから。

「あなたの希望通りの守護魔法がかけてあるそうよ

「お、早いな。やっぱり評判通りだ」

今も、彼は無邪気に笑つて剣を受け取つていて。その笑顔は昔と変わらず、人を引きつける華やかさがあつた。

それを見ないように少しだけ零は視線を逸らしたのは、心の中にまだわだかまりがあるからかもしない。

「うちの魔女は、優秀だからね。安心していいよ

素つ氣ないふりで、魔女の仕事について口にするが、言っている事は真実なので、声に少しだけ誇らしい気持ちがこもる。

本人には、絶対に言わないが、零が優秀であることは、多紀は認めているのだ。

だから、人に零のことを話すときは、胸をはって彼女を讃める。

「楽しそうだなあ、多紀」

男が、多紀の顔をやけに真剣な目差しで見つめながら、ふいにそんなことを言う。

「本当に、楽しそうだ。屋敷にいた頃は、いつも仏頂面しててさ、俺にも怒つてばっかりだつた」

「それは、あなたがいつもだらしない格好していくて、部屋は汚し放題で、血のついた剣も放りっぱなしで……」

言い掛けて、まるで誰かのよう魔女と同じだと思つ。

魔女にも同じように怒つたり説教したり文句を言つてている。でも、魔女とこの男は違う。

どこか、似ている二人なのに、確かに違うのだ。

「なんだかさ、魔女も、俺と似たような雰囲気に感じたのにさ、多紀は魔女のことを話すとき、いい顔なんだよな」

言われたとおりのことを、多紀も思つてしまつた。

この男を怒つていたときは、胃も痛かつたし腹立たしかつたしつとも言うことを聞いてくれないことが嫌だつた。

自分のことをからかつてばかりで、本心を見せてくれないから、男を見るのが、少しずつ辛くなつていつた。そして最後は彼女を一人残して、いなくなつてしまつたのだ。好きだと言つたくせに。

「あーあ、馬鹿だよなあ、俺。いろいろ、本当に莫迦だつた」

天を仰いだ男の顔は、見えない。

悔いでいるのか、それとも悲しんでいるのか。どちらにしても、もうすでに終わってしまったことだ。

あの日、彼は一人で旅立ち、多紀は生まれ故郷に戻つた。

「同じだよ、私も。いろんな意味で馬鹿だつた」

もうちょっと、素直になればよかつた。

もう少し、優しくできればよかつた。

それでも、置いて行かれただらうけれど、今のよひに後悔はしなかつたかもしない。

なかつたことを思い返して、あれこれ歎むこともなかつたかもしない。

なにより、そうしていれば、ちゃんとお終いに出来ていただろうし、強引に恋れようとする思い出ではなく、懐かしい記憶として残つたはずだつた。

「俺のこと、ちゃんと好きだつた？ 今更だけ？」

「うん。好きだつたよ、今更だけ？」

今度はちゃんと素直に言えた。あの時は、一度だつて面と向かつて言えなかつたけれど。

「そうか、よかつた。俺も、多紀のこと、好きだつた。全部、本当に、冗談じゃなくて本気だつたんだ」

男も、そうだ。

彼は悪ふざけの延長でしか、その思いを多紀に伝えてくれなかつた。

お互いまだ。

そう思えてくると、自然に笑みがこぼれてくる。最初は零に言われて嫌々だつたけれど、ここで男と会つことが出来てよかつたかもしぬれない。

男の方も同じなのだろう。

初めて見る、優しい笑みを浮かべている。もつと早く見てみたかつたが、今だからこそ、知ることが出来た表情だ。

お互い、これでふつきたということなのかもしない。

「魔女に伝えておいてくれ。約束の報酬は、ちゃんと後日届けるからつけて」

「報酬？ お金じゃなくて？」

「ああ。ちょっとお金が足りなくてさ。別のものを渡すつて約束を

したんだ」

雲にしては珍しい」ともあるものだ。

その報酬について、少しだけ気になつたが、雇い主がいいといつたのならば、多紀が口をはさむ理由などない。

「わかつた、伝えておく」

「じゃあな、またいつか」

「うん。また、いつかね」

そう言って、笑顔で別れた。

いつか、なんていうのは、約束じゃない。あの時別れてしまった一人の道は、もう交わることはないのだ。

それでも、『いつか』という言葉には不思議な響きがある。

またどこかで巡り会えるのではないかといつ、そんな甘い夢を見ることが出来る。

その時は、今よりもっと言葉を交わし笑いあえることを願おう。

しばらぐして、届いたのは、一枚の絵。

じゅうやら、金が足りないと、この男に、残りの報酬は多紀でも自分でも描いてくれればいいと、ふざけたことを雲が言つたらしく。だが、よく見ないと、その絵に書かれている物体が、性別ビリュウか、人物なのかどうかさえわからなかつた。

「随分、斬新な絵だな」

雲が絵を見て唸つているが、それはたぶん上下逆さだ。そのことを指摘しようか多紀は悩んだが、元々、上下左右がよくわからない絵なので、指摘するのを止めにした。

「昔から、彼の書く絵は、これでしたよ。でも、こいついう絵が良いつて言う相手もいるらしいですから、世の中って本当にわからないです」

多紀にしてみれば、もつちよつとわかりやすいほうが、部屋に飾るにも人にあげるにもいよいよ思えるのだが、何故か新しもの好

きな貴族や商人の間に、この手の絵が流行つてらしい。芸術方面に疎い多紀には、さっぱり良さがわからない。

「しかし、愛はあるんじやないか？」

上下左右に何度もひっくり返しながらも絵を眺めていた雲が、そんな感想を口にした。

「どこにです」

「色遣いが、優しいじやないか。森のよつだよ」

言われて初めてそのことに気が付いた。

木々の縁、森に咲く花の色、湿つた土。森で見かける色の全てが、その絵の中についた。

「でも、やつぱりもうちょっと美人に描いてもらいたかったです」画面の中央で、向かい合つているらしい、目と口と鼻らしきものがやたらと大きさにかかれた、人だか植物だかわからない人物二人に、多紀は正直に本音を言った。

5・おかえりなさい

ひとりぼっちは、好きではない。

否、一人になるのが嫌なのではなく、いつも誰かが側にいるという生活をしていたから、静かな部屋に一人きりでいるのが苦手なのかもしない。

多紀が生まれた時は、両親に祖父母、姉や兄がすでにいた。家は大きくなもなく、かといって小さくもない、村では平均的な造りで、どこの部屋を覗いても、必ず誰かがいて、多紀が一人になるということはなかつたようと思う。

少し大きくなつた頃には、下に一人ほど弟が出来ていたし、親の手伝いをしていないときは、幼馴染みや兄弟たちと森や村の中を走り回つていた。

働く年齢になると、村から離れた商家に奉公に出たが、そこでも使用人の誰かと常に相部屋だつたし、働いている時間も一人きりということは殆どなかつたのだ。

今はこの家で魔女と二人きりだが、一人という気がしないのは、どこにいても、魔女の気配がするからだろう。

得体の知れない薬草を煎じる匂いだつたり、衣擦れの音だつたり、煙草の香りだつたりと様々な匂いや音がここにはある。だから、同じ場所にいなくても、家のどこかに零がいるのだとわかるのだ。けれども、今日は一人きり。

その匂いも気配も、屋内に感じられない。

掃除も、片付けも済ませ、店番をしながら客が置いていった雑誌や本を眺めているだけで、時間は過ぎていく。滅多に来ない客も、やはりいつもの如く訪れる事はなく、多紀は落ち着かないまま、棚の商品を移動したり、なんとなく机を拭いてみたりと、意味のない行動を繰り返している。

要するに、一人だと退屈なのだ。

基本的に雫は出不精で、せいぜい出かけたとしても、森の中か、一番近い村までだ。日々の日用品を購入するため買い物に行くのも、商品を届けに行くのも、実際にやっているのは多紀なのである。

だが、そんな雫でも、年に数回出かけることがあった。

魔女同士の集まりであつたり、昔世話になつたという人の断れない頼みだったりとその時々で理由は様々だ。どの時も、必ず面倒だと文句を言つたが、見た目に反して律儀な雫は、ぶつぶつと言いながらも、相手のところに出向いている。

今回は確か昔なじみの魔女に会いにいったのだつたろうか。

長らくあちこち旅していたが、一箇所に腰を落ち着けたので、是非遊びに来てほしいと、誘いがあつたのだ。急ぎでの用があるわけでもないので、行こうかどうしようかと迷つていたようだつたが、その土地で最近発見された珍しい薬草を見ることが出来ると知り、はつきつて出かけることにしたのだった。

「暇」

とりあえず、呟いてみるが、声は空しく響き渡るだけだつた。

日帰りできる距離で、夕方には帰ると雫は言つていたから、実際に多紀が一人になるのは数時間のことだ。それなのに、妙に部屋が広く感じる。

今日だけではない。前のときも、その前のときもやつだつた。

一人きりだと、何かをやる気にもならない。

雫は、店は一日休みにして、遊んできたらどうかと言つたが、友人の誰とも休みがかぶらないで、店でうじうじする羽目になつている。

結局、同居人がいないと寂しいのは、雫ではなく多紀の方といつことかもしかなかつた。

ちりんと可愛らしい鈴の音がして、多紀は顔を上げる。

そこには、いつもよりも少しだけ着飾つた格好の雫が立つていた。

とはいっても、朝確かに結い上げていたはずの髪はほつれ、袖は乱雑にまくり上げられていたのだが。

「おかえりなわー」

そう言つと、「はいはい、ただいま」と、返された。

続けて、疲れたと言い、荷物を放りなげる。

がしゃんと何かが割れる音が聞こえた気がして、多紀は、何がはいつているんですかと悲鳴のよつた声をあげてしまった。

行く時には持つていなかつたはずだから、出掛けた先で手にいたものなのだろうが、扱いが雑すぎる。

「あー、なんだかいろいろだよ」

「いろいろつて、ああ、変な汁がしみ出てるー。」

布製の袋は薄い黄色に染められていたが、その一部から青黒い液体のようなものがしみ出している。

慌てて抱え上げた袋は、近づくと変な匂いもした。

「これ、魚臭いんですけど」

「そういえば、魚の油漬けがどうとか、口にしてたね。魔女のお手製で、独特の方法で付け込んでいたんだってさ。酒の肴になるそういうだよ」

そういう食べ物があるといつことは、多紀も聞いたことがある。美味だという話だが、値段もそれなりにするし、何よりきつこ匂いがするということで、女性にはあまり好まれない。

ほとんど嫌いなものない零と多紀は、匂いくらいでは驚かないが、店の商品に匂いがつくのは困る。

慎重に割れたビンの欠片を取り出しながら、むりに強くなつた匂いに多紀は顔をしかめた。

「ああ、これ、量が多くないですか。油はほとんど漏れちゃつたし、もう今日食べるしかないってことですよね」

他の瓶に詰め替えてもいいのだが、油の成分も作り方もわからない以上、余計なことはしない方がいい。

保存食だったとしても、蓋を開けてしまえば食べるしかないのだ。

「責任とつて、ちゃんと全部食べてくださいよ」

多紀の小言に、零がにんまりと笑つた。

「やつぱり、家の方が落ち着く。口うるわこ同居人がいないのは、どうにも変な気分だつたからね

「口うるさくは、余計です」

もつといひ文句を言いたいといふだが、部屋中に漂い始めた魚の匂いをなんとかするほうに忙しく、零の粗手をする余裕がない。零の方は、自分が手伝えば、さうにひどいことになるのがわかっているので、店の片隅に移動すると、こつものじとく懐から煙草を取り出した。

部屋の中に漂うのは、煙草の匂い、魚の匂い、それにあちこち並べてある薬草の匂い。

そこに、零の気配が重なつて、多紀があちこち動き回るたび、空気が流れる。

いつもの日常。

いつもの一人だ。

「せつからくだから、魚に合わせて、とつておきの酒をあけるか、呑気にそんなことを言ひ零も、いつもと変わらない。

昔からそうだ。

年をとつたが、零は変わらない。

変わるものなのも、面倒くさがりなのも。

「ああ、本当に、家は落ち着くねえ」

しみじみとそう言ひ零は、すっかり寬いでいる。

「寛ぐ前に、ちゃんと着替えてきてください」とば

「はいはい。ついでに酒を取つてくるよ」

あなたの小言を聞くと、家に戻つた気がするねと、余計な一言を付け加えると、零の姿が店の奥へと消える。

そんな彼女の姿を呆れたような顔で見送りながら、多紀自身も、零がいると、急に家の中が賑やかになった氣がすると感づ。振り回し、振り回される関係だけれども、一人でいるのが居心地

がいいから、一緒にいられるのだ。

そして、『おかえりなさい』と言ふ相手がつやんじるじやんじや、なことも幸せなことなのかもしれなかつた。

6・かえりみち

同居人が待つていてると思つと、帰るのも楽しいと知つたのはいつだつただろう。

魔女として主に仕えている時ではなかつた。

年老いた魔女に拾われて、暮らし始めてからだつたような氣はする。彼女は、ぼうつとして食事をすることさえ忘れる零に、根氣よく接した。

おかえりと言われても、素直にただいまとは言えなかつたし、どうせすぐ出て行くつもりだつたのだ。

それが、いつのまにか年老いた魔女の仕事を手伝つようになり、彼女が亡くなつたあと、結局は店を受け継いでしまつた。挙げ句の果てに、普通の女性と一緒に暮らすといつ、昔なら考えられないことをしている。

人生、本当にわからないものだねえ。

夕暮れの森を歩きながら、零はそう呟いた。

遠くに、薄ぼんやりと明かりが見える。

明るいのは店側なので、きっと多紀はそこにいるのだろう。誰もこない日でも、多紀はきちんと日が沈むまでは店を開けている。時々サボつたらどうだいと言つてみるが、雇われている以上そんなことはできませんと、恐い顔をされてしまった。

真面目といつよりは、融通が利かないと言つたほうがいいのだろうが、そういうところを含めて、それが多紀という人間だ。

それに、こうやって零がたまに家をあけ、帰宅したとき、普段は仏頂面な顔が、嬉しそうに綻ぶ。

零を前にした愛想笑いでも、零のつまらない[冗談に義理で笑う時でもない、多紀自身の笑顔だ。

子供の頃は、もつと頻繁に浮かべていた。

お菓子を渡された時だつたり、いたずらに成功した時だつたり、頭を撫でられた時だつたりと、数え上げてみれば、実に様々な状況で、多紀は笑っていた。

あまり笑わなくなつたのは、街へ出てからだろうか。

人の下で働くようになり、処世術を覚え、感情を押し殺すようになつた。それを大人になつたと人は言うのだろうが、たまに村に帰つてくる多紀が、どんどんかわいらしさを失つていくのは、正直つまらなかつた。

だから、彼女が路頭に迷つた時、つい誘つてしまつたのだ。

『うちに来ないか』と。

昔、この森を走り回つていたときのよつこ、笑つてほしいと思つたからだ。

かつて一人だつたときと違い、雫の足取りは軽い。変なものもたくさん仕入れてきた。妙なものも手に入れてみた。多紀はこれを見て、呆れた顔をするだらう。その時の様子を簡単に想像できて、雫は思わず笑つてしまつた。そうやって、多紀に接しているうちに、自分も感情を表に出すのが苦痛でなくなつたのだと、恐らく彼女は知らないだらう。知らなくてもいいのだ。

知つてしまつて遠慮されるのも嫌だし、氣を使われるのも困る。多紀は多紀のまま、子供の頃と同じように雫を振り回してくれればいい。

もちろん、多紀から言わせれば、振り回しているのは雫の方だと言い張るだらうが。

ここまで続くかわからぬ生活だけれど、出来れば長く一緒にい

たいものだと、そんなわざやかな願いを、最近の雪は抱いてくる。

7・きいてみたいこと

その客は、いつも無口だった。

多紀が話しかけても、必要最低限の答えしか返つてこない。

購入していく品物は、いつも同じだ。

傷薬、痛み止め、それから眠るための薬。

必要な数だけ口にして、多紀が金額を言うと、無言のままお金を出す。無骨な指先が、取り出したお金を丁寧に数え、それを受け取つた多紀が正しく揃つてているかの確認をすると、ようやく品物を受け取るのだ。

そして、最後に失礼する、と口にして店を出て行く。

いつも、同じだ。

だから、他の客と違つて、多紀の興味を引いた。

「眞面目な人ですよね」

そう多紀が言つと、雲が変な顔をした。

たつた今出て行った男のことを言つているのだとわかつているのだが、雲にはあれが多紀の言つようの男には見えていない。

「ただの胡散臭いおっさんじゃないか」

年の頃は30代後半。雲が言つほど見た目は老けてはいないが、どこか威圧感のようなものもあって、若いとは言い切れない。かといつて、もつと年寄りかと言われば、あの指先の張りは絶対に違うと多紀は思う。

「いろいろ聞いてみたいですよね。……聞けないですけど

もちろん、本人が隠したいことを根掘り葉掘り知りたいわけではない。純粹に多紀が気になるだけで、あまりしつこく尋ねるのは、魔女の店の店員としても、してはいけないと、わかっている。

「ちなみに、何を聞きたいんだい？」

「そうですねえ。年とか、職業とか、名前とか」

「聞けばいいじゃないか。やましい」とでもしていなければ、特に隠すものじゃない」

それはわかっている。

例えやましいことがあって、偽名や嘘を言ったとしても、どうせ多紀にはわからないのだ。零も、金をえきちんと払いをえすれば、客の素性など気にしない。

「聞こうとしたんですけど、もう雰囲気が余計なことは何も聞くなーって感じじゃないですか」

「ああ、なるほど」

零が納得するほど、男は無愛想だった。そついえば、笑った顔も見たことがない。

「後は、奥さんがいるのかとか、子供がいたらどんなふうに接しているのかとか、ええと、それから、職場でも同じように無口なのか」「さすがに、そこまで聞くのはどうかと思うよ」

あくまで多紀の知りたいことだ。本人に聞くわけではないので、好き勝手に思いつくことを言つてはいるだけだが、やはり普通は親しくない人間に尋ねる事柄ではない。

「他のお客さんは、聞いていないことでも話すんですけどね」

最初はよそよそしくても、何度か訪れていれば気安くなる。多紀が聞かれて自分のことを話すこともあつたし、その逆もあつた。

「常連はそんなものだよ」

「あの人も常連のはずです」

少なくとも、定期的に訪れるということを常連の定義とするならば、彼は間違いなくそうだ。

「いまだに、彼の口からは、あいむつと用件以外の言葉を聞いたことがないです」

「そうだなあ、確かに私もない」

「顔は悪くない。平均的だが、好感のもてる顔立ちだ。」

黒い髪に藍色の瞳もありきたりのもので、目を引くものではないが、やや浅黒い肌の色が、他国出身か、両親のどちらかがそうなのだろうと想像させる。ここへくる時の服装も、特に身分を感じさせるものではない。彼が持つ剣も、使い込まれてはいるが、どこにでも売つていそうな代物である。

「私は、職業軍人かなと思います」

男の手をいつも見ている多紀は、彼の手の堅さや動きを見て、そんなことを考える。

「そうか？ 私は、冒険者か傭兵だと思うな。だいたい軍人なら、薬をここで買う必要はないだろ？ 支給されるだろ？ し、軍医もいる」

確かにそうだ。効き目はいいが、魔女の薬は少々高い。しかも、男が手にるのは、あくまで応急処置的なもの。長期に使うならば、きちんとした医者に頼むか、正式に国から許可を得た薬屋を頼るべきだろ？ 魔女の薬ひとつで、普通の薬がいくらでも買えるし安全安心なのだ。

「でも、眠れない時のお薬も買うんですよ。傭兵とか冒険者は、あまり利用しないと思うんです」

自分の家ならまだしも。宿を利用したり、場合によつては野宿をしなければならない職業のものが購入するだろ？

「まったく別の職業かもしね。例えば、それなりの屋敷に雇われた用心棒とか。見た感じ、妙に小綺麗な雰囲気だろ？ だが、それほど上等な布地を使った服を着ているわけじゃない」

言われて、男の服装を思い出す。品のいい仕上がりだつたが、確かによくある服だ。流行にのつたわけでもなく、一点物でもない。ほこりんだところも丁寧に繕つてあるから、物持ちはよさそうだ。奥さんがしつかりしているだけかもしれないが。

「用心棒でも、適当な格好をしている人もいますからね。主人が気にならない人の場合、あてにならないかも」

「そうだね、単に男の性格によるものかもしれない」

様々な人がいるわけだから、やはり服装だけで判断するのは難しい。

それらしい格好をしていたらわかりやすいのだが、まさか魔女の店に来るのに正装してきたり、仕事着を身に付けてくるものはいいだろ？

「剣を握る仕事つていうのは間違いなさそうなんですけれど……あ、傷薬とかだから、剣術道場の師範とかはどうでしょう？ 似合いそうだし」

「おお、似合いそうだな。寡黙な剣術師範か」「零も、多紀の考えにのつてくる。

「弟子には厳しそうですね」

「そうか？ 案外面倒見はいいかもしないぞ」

「でも、私は、その方がいいかな。やっぱり職業軍人や傭兵は恐いです」

二人して好き放題言いながら、おそらくきっとどれも正解ではないのだろうと思っている。

それくらい、彼の素性の推測は難しい。

だからこそ、こうやって盛り上がりてしまったのだろう。本人が聞いたなら怒り出しそうではあつたが。

それからしばらく、二人で考えられる限りの職業を考えたあと、多紀は息を吐いた。

「考えてみると、結構いろいろ思いつく職業がありますね」「もう少し想像してみるのも楽しいかもしない」

もちろん、次に男が来たときには聞いてみたいことなどなに一つ口にはしないけれど、それでも、男が帰った後は、こうして二人で楽しむのだろう。

でもいつか、本当のところを聞いてみたいとは思っている。

とりあえずは、最初は名前から、だろうか。いや、それだと、告白でもするみたいだ。

そんなことを考えながら、多紀は客が出て行つた店の扉をもう一

度眺めた。

零は朝が苦手だ。

起きるのが面倒だし、着替えるのも億劫だし、朝ご飯を食べるよりも寝ていた方がいい。

だが、同居人の多紀は違う。

朝は早いし、朝食の支度の前に、家の周りの掃き掃除までしている。街で働いていたときはもつと早起きだったから癖になっているのだと本人は言うが、零からしてみれば、信じられないことだ。

そのせいなのか、最初の頃は、多紀も、自分を起こそうと必死になっていた。だが、幾らひっぱっても寝台から離れない零のことは諦めたらしい。

その時、『そういう人だつた』と、なんともいえない顔をした多紀に言われ、複雑な気持ちにはなつたが、敢えて何も言わなかつた。面倒だからである。

ふてくされたように返事をしない零に苦笑した多紀は、その代わりにと条件を出した。

必ず昼までには起きてください、と。それさえも、時々破つてしまっていたのだが、この頃は多紀の作る朝食兼昼食のおいしさに負けて、とりあえず部屋から出るようにはしている。

それが作戦なのか、朝食兼昼食には、必ず零の好物が含まれていた。時々は、新作のお菓子とやらもついてくる。逃せば、それは森で遊ぶ子供たちに渡されてしまうので、文句をいいつつも、起きるよくなつてしまつた。

これでは、まるで多紀の手の上でうまく踊らされていくようではないか。

おかしい。この家の持ち主は零で、雇われている立場が多紀のはずだ。

それとも、最初はただの店番兼住居の家事全般をやってもらいつつ

いつ条件だつたはずの多紀のことを、いつのまにか同居人と認めてしまつたせいなのか。

一緒に暮らし始めて、もう随分立つのだ。

互いの癖も、考え方も、だんだんわかつてきた。性格も年齢もまつたく異なる一人がそれなりにやつてきてるのは、慣れというだけではない。

なんとなく、側にいても苦痛でないところも、理由だ。

うるさく言われて腹も立つし、一人で暮らしてると面倒なことも多いが、それでもお互いになくなれば寂しいと思つだらう。何かあれば心配するし、病気になれば、できるだけのことはしようとする。気が付けば、そういう関係になつていたのだ。

だらしなさすぎる零と、生真面目すぎる多紀。一人の駄目な部分を、互いに補いあつてゐる自覚は零にもある。

結局は、お互いがよければそれでいいのではと最近では思つてゐるくらいだ。

窓の外から、鼻歌が聞こえてくる。

少し調子が外れているが、多紀だ。小さい頃から、歌は得意ではなかつたなど、そんなことを思い、自然に笑みがこぼれる。

今は、夜が明けてほんの少し立つた頃。外がようやく明るくなつてきたが、季節柄部屋の中はひんやりとしている。

実のところ 零はとっくに目は覚めているのだ。

ただ、こやつてじろじろしているのが、至福の時間なのである。暖かで、ふんわりとした寝具はちょうどいい肌触りで、いつまでも潜つていてたい。目を閉じれば寝てしまうほど居心地がいい中、どうして外に出たいなどと思うだろうか。

などと、多紀が聞いたら怒つてしまいそうなことを考えていた零は、寝具の中に潜り込んだまま、耳を澄ます。

鼻歌と共に、外を歩き回る音も聞こえている。

春ならば、柔らかい音だし、夏は少し渴いた足音だ。秋にはそれに枯葉を踏みしめる音が加わって、冬は雪でも降れば足音そのものが聞こえにくい。

『この国には、四季といつものがあるのよ』

そう教えてくれたのは、雪の前にここに住んでいた魔女だ。初めて雪が降った日、庭が真っ白になつたのを見て驚いた。雪が生まれた国は暖かなところで、冬と呼ばれる季節でさえ、ほんの少し寒いくらいで、雪など降らなかつたのだ。

これほど寒いとは思わなかつたし、暖かな寝台から出るにとがこんなに辛いのも知らなかつた。

そういえば、あの人も、口うるさい人だつた。

自分の祖母といつてもよい年齢の魔女は、生活面に關しては厳しい人だつたのである。

主がいた頃は、魔女としての力が必要でない時、何をしていようが文句は言われなかつた。仕事さえ完璧にこなせばよくて、そこに感情は必要ない。失敗しても、それはそれで他の策が用意されていて、主はほんの少し顔を顰めるだけで、何も言わなかつた。

それでも、今よりはもつとちゃんと起きていた気がするし、食事も朝晩ときちんと口にしていたはずだ。

だらしなくなつたのは、ここへ住み着いてからで、馴染みすぎで、くつろぎすぎて、ぼうつとすることが多くなつた。

もしかすると、緊張しなくなつたからかもしれない。魔女として主に仕えていた時は、常に気を張り詰めていた。

主や使用人の視線を気にしていたのは、どこにいても常に監視されていたからだ。魔女である自分が怯えるといつことは少なかつたとは思うが、見られる度に嫌な気持ちになり、決して隙は見せないようにしていた。

今の自分とはまるで違つし、もう一度あの生活に戻れと言われても、嫌だろう。きつとこついうだらしないところが本来の雪の姿な

のだ。

年老いた魔女は、零が朝起きないことに關しては、諦めたようだが、それ以外のことは事細かく注意してきた。元々、いろいろな面に厳しい人だつたのだ。

本氣で怒つてくるから、いつも本氣で文句を言つた氣がする。

それを思えば、まだ、多紀は可愛い方だ。

口づるさいけれど、零が強気に出で絶対に譲れないと言えば、困つた顔をして結局は折れてくれる。

それなりに妥協はしてくれるのだ。

一応年長だし、雇い主ですから、と付け加えるのを忘れないが。それでも、あの口づるさがなくなつてしまえば、寂しいと思つのだろ?。

そんなことを思つ自分に苦笑しながら、外から聞こえる多紀の鼻歌を子守歌代わりに、零はもう一度眠りの中へと落ちていった。

9・けんかした

「あの人つたら、ひどいのよ。」

店の扉を開き、足音も高く飛び込んできた女性は、息を弾ませながら、そう叫んだ。

本を読み耽っていた多紀も、ぽんやりと商品棚に奇麗に並べられた瓶を眺めながら煙草を吸っていた零も、そちらに視線を動かし、絶句している。

「もう、もう、絶対に許せない！ 零さん、何かあの人を困らせる薬はないの！」

「なんだ、柚那じやないか。旦那が浮気でもしたのかい？」

興奮している柚那に、驚きからすぐに平静を取り戻した零が、からかうように言う。

多紀とは幼馴染みの間柄で、一緒に森を駆け回っていた仲だから、当然零も柚那のことは幼い頃から知っている。

6年前に、同じ村出身の男性と結婚し、すでに子供も2人いた。最近では、少しふくよかになってきた体が悩みの種で、この店へも、少しでも痩せられる薬がないかと、おしゃべりがてら顔を覗かせている。

もちろん、痩せる薬に関しては、『樂して痩せる薬はないよ』と零に毎回も言われているのだが、いまのところ諦める気配はなさそうだった。

「違います！ 浮気だつたら、家から追い出してやるといひだつた……じゃなくて、浮気も嫌だけれど、もっと困つたことになつてゐるんだつてば」

そういえば、柚那の夫である彼女よりも1つ年下で、入り婿だつたはずだ。零も多紀も、柚那同様小さい頃から知っているが、大人しくて目立たず、気も弱かつた。遊ぶ時も、他の男の子たちと違つて走り回ることはせず、転んでは泣き、森で小さな獣を見ては泣き、

女の子にきついことを言わわれては、泣いていた。

取り柄といえば、優しいことと、村一番の器量よしだつたことだ。少なくとも、大きくなつて髪が生えてくるような年になるまでは、いつも女の子に間違えられていた。

そんな彼を、弟のように もしかしたら、一番の子分のつもりだつたのかもしれないが、かまつていたのが柚那で、彼も彼女に一番懷いていた。

それが、いつ恋に変わつたのかわからないが、気が付けば村公認の恋人同士になり、仲が良かつた幼馴染み同士の中では、最初に結婚したのだ。

他の子のように乱暴でもないし、きちんと仕事もするし、良き夫、良き父親でもあるのだが、ただひとつ、彼には困つた趣味がある。恐らくそれが原因の喧嘩なのだろうが、柚那の様子はいつもよりも激しい。

一体何をやらかしたのか。

人の良さそうな無駄に美形な幼馴染みの顔を思い浮かべながら、多紀は溜息をつく。

「浮気じゃないなら、何やつたの」

話が進まないので、とにかく原因を突き止めようと、多紀は尋ねた。

とたんに、柚那の目が釣り上がる。

「また、悪い癖が出たの！」

「あー、なるほど」

多紀は納得したように頷き、零はやれやれとも言いたげに肩を竦めてみせた。

柚那の夫の悪い癖。それは、無類の賭け事好きだということだ。それほど強くもないのに、賭け事となると、目の色が変わる。

村人たちと、酒場や仕事の合間に少し遊ぶくらいならいい。皆、彼の賭け事好きは知っているから、よほどのことがなければ、無茶なことはさせない。反対に諫めることの方が多いし、それでもやめ

ないようならば、金ではなくちょっとした食べ物や収穫物程度を賭けたりする。時には、仕事の手伝いをするかもしれないか、ということもあった。

結婚して子供が生まれてからは、独身時代のようになつて街へ行つては身ぐるみ剥がされるような無謀な賭け事は止め、おとなしくしていたようだ、多紀としては安心していたのだが。

「この間、うちに育てた野菜を市へ売りに行つたのよ」

「柚那のところの畑でとれた野菜、おいしいものね」

お裾分けに売り物にならないものをもらつたこともあるし、まとめて購入したこともある。

「いつもは私もついていくんだけれど、今回はうちの下の子が熱を出しちゃう。一人で行かせたわけ」

そうしたら、あの馬鹿、街で古い知り合いに会つて、うまいことのせられて賭け事をしたあげく、売り物を全部とられたのよ、と柚那が一気にまくし立てた。

相手の出した条件が、野菜を売つた金額の数倍だつたらしいから、そのあたりでおかしいと思うべきなのだが、相手の誘いが余程上手かつたのか、それとも彼が誘惑に勝てなかつたのか どちらにしても、大損をしたのは間違いない。

「ああ、もう、腹が立つ！ 一言、文句を言つたら、あの馬鹿、なんて言つたと思う？」

「さ、さあ？」

「お前のために頑張つたのに、よ。頑張る方向が間違つてると思つてしまふ」

その後は、途切れることなく彼女の口から出でてくるのは、夫に対する日頃の不満だつた。

「とりあえず、落ち着いて」

ようやく多紀が声を出したのは、柚那が息もつかせず夫への文句を言つ切り、とつとつ言つことが無くなつた後だつた。

「そうだ、いいものがあるよ」

何かを思いついたといつぶつと、雲がぽんと手を叩いた。

「多紀。 そこにある、例のあれを出しな」

「え」

あきらかに狼狽えた多紀が、いいのかと問いかけるように雲を見た。

「いいから、いいから。 作っては見たものの、使い道がなくて困っていたんだ」

「あきらかに怪しげな感じがしていますけど」

雲と多紀の様子を見ていた柚那が、言葉だけは一応訝しげだが、身を乗り出し、田は輝いている。

そういえば、昔いたずらを決行するとき、先頭にたつのは、柚那だった。男の子たちが尻込みするような場所でも平気で入つていつたし、自分より大きな動物にも怯まなかつた。

あまりにも無謀なことばかりするので、彼女の両親はいつも青筋を浮かべていた気がする。

「感じじゃなくて、たぶん、かなり怪しいと思つよ」

そう言いながら、棚から多紀が取り出したのは、一枚の布だった。柚那の前で広げると、淡い光を放ち、わずかな空気の流れでも搖れるほど、薄い。透かしてみれば、反対側が見えるほどだ。ただ、残念なことに、よく見れば、といひどひで織り目がよじれていたが。

「不思議な布だよね」

手に取つて間近で眺めながら、柚那は首を傾げる。

「どんな糸を使つているの？ みほど高級な糸でも、ここまで薄く作るなんて、無理だよ」

「糸を加工したのも、織機で織つたのも私なんだよ」

得意そうに言つ雲に、柚那はぎょっとしたように田を見開いた。

「えー、加工はともかく。雲さん、織機壊したんじゃないの。でも、

そうか。だから、あちこち織り田が緩んでいるんだ

「一言多いよ、柚那」

「そうよ、柚那。織機は1回しか壊れてないから」

修理をしたのは多紀なので、間違いない。こんがらがつた糸をほどくのには多少手間取つたが、多紀でも修理出来る程度の壊れ方だつたので、零にしては珍しいと思つた記憶がある。

「お前も失礼だね、多紀」

柚那だけでなく多紀にまでそう言われて、零は顔を顰めている。自分としては、むしろ誉めてもらいたかったと言いたげだった。以前使い物にならないくらいに織機を駄目にしたことから考えれば、随分成長しているはずなのだ。多紀が厳しすぎるのだと反論したいが、じろりと睨まれてため、理不尽だと言うに留まつた。

「これはね、ちょっと特殊な糸で出来てゐる布さ。試作品だけどね、人の心に介入する魔力の媒体になる」

物騒な言葉に、多紀と柚那は息を飲む。違法なんじやないのか、と内心で少しだけ思つた。

「もちろん、ひとつだけ条件付け出来るつて程度にしているし、効力は弱い。操るつていうのもちょっと違つからね」

「どう違つんですか？」

「賭け事を嫌いにさせたり、止めさせたりすることはできない。出来る魔法がないわけじゃないけれど、それをやると、人格そのものに影響が出る。最悪、精神が壊れるつて可能性もあるしね」

確かに、元からの性格や性癖を、本人の努力ではなく魔法の力で無理矢理変えれば、どこかで綻びが出るのだろう。

「今回みたいな無茶な賭けをしたときだけ、発動する魔法を布にかけるんだよ。で、その布を、普段着る服や小物に縫い込んでおくのさ。で、いけない賭け事をしようとするとき、こう、びりびりと」

大げさに身を竦ませて痺れる仕種をしてみせる零に、多紀と柚那は顔を見合させた。

「い、痛そう」

控えめに言いながら、多紀はびりびりする瞬間のことを考えて身震いした。前に、雪が作ったおもちゃを触つて、『びりびり』したことのあるのだ。あれは、いたずらが過ぎたる多紀と柚那に対するお仕置きだった気がする。

「ねえ、柚那。本当に実行するの？」

かつて味わった気持ち悪さを思い出してしまった多紀が、恐る恐る尋ねると、同じ経験をしたことのある柚那は考えこんだ。

「そうだね。考えてみれば、そういう方法で止めさせるのはよくない気がする。もう一度だけ、話し合つてみるよ。多紀たちと話していくで、少し頭が冷えたし。……あの人だつて、なんだかんだいって、反省しているんだし」

柚那の夫は、結局のところ自分の妻には頭が上がらない。気が弱いからとこいつわけではなく、やはり自分の悪い癖のことはわかつているし、妻が自分を怒る時には、ちゃんと理由があるということも理解しているのだ。ただ、幼馴染みの気安さで、互いが感情的になつたとき、本音を言ひすぎてしまつだけで。

「話し合いで納得するなら、そつすればいいんだよ。で、それでも使つ気になつたら、来ればいいだ。お代は試作品だから安くしとくし、別に旦那のことだけじゃなくとも、望む魔法をかけてあげるよ」まるで性悪な魔女の如く、怪しげで意地悪げな笑みを浮かべて、雪は言つ。

「うわー、悪い魔女みたい、雪さん」

子供向けの本に出てくる悪い魔女の見本のような笑顔を引っ込めると、雪は、大げさに驚く柚那に向かつて手を伸ばし、その頭を撫でた。

「そうそう。あんたはそつやつて、昔みたいに明るく元気な方がいい。旦那に言えない文句でもあるんなら、ここへ来て愚痴ればいいだけの話さ」

「雪さん……ありがと」

しょりじへ目を伏せた柚那の頭を更にぐしゃぐしゃと雪が撫でる。

「それに、そろそろ帰らないと、子供たちも心配するだろ？」「

雲も多紀も、柚那の子供たちとは顔なじみだ。かつての多紀たちと同じように、森は彼らの遊び場で、この『魔女の店』に顔を覗かせるのも珍しくない。

「ここまで大きな喧嘩はさすがに少ないが、小さな喧嘩をするのはよくあることで、柚那たちはその度に大騒ぎする。仲直りするのも早いが、子供たちにとつては、その度に恐くなる母親と、おろおろする父親を見るのは、悲しいらしい、柚那は知らないが、子供たちが雲に、両親が仲良くなる魔法はないかと尋ねてきたこともあった。

「あんたたちが喧嘩して、一番悲しむのは子供たちだからね」

「わかつてます。……そつだよね、私も両親が喧嘩したら、すぐ悲しかったもの」

懐かしむようにうつ咳じて、柚那はよし、と氣合を入れるよつこ自身の頬を叩いた。

「もう、帰るね。きっと、あの馬鹿、迎えに来ることも出来ずに家でおろおろしていて、子供たちにいろいろ言われている気がするし」
氣が弱い彼は、柚那がここへ来ていることはわかっているはずだつた。何かあれば、友人である多紀のところへ行くことは村の人間なら誰でも周知の事実だ。

「ごめんね、多紀。大騒ぎしちゃつて」

「気にしてないから。今度は子供たちと一緒に来て」

「そうする。あの子達、魔女の店のお菓子はおいしそうで、いつも言つてるから」

入ってきたときは違い、幸せそうに笑う柚那に、多紀もほつと息をつく。また喧嘩はするだらうが、それをちゃんと乗り越えていける強さがあることを多紀は知つていて。

だからこそ、いつも幸せそうに笑うことが出来るのだらう。
少しだけ、幼馴染みを羨ましく思いながら、家族の待つ家に戻つていく柚那を、多紀は見送つた。

店の扉が、可愛らしい鈴の音を鳴らしながら開いた時、多紀は大きな荷物を抱えて考え込んでいた。

しばらく寒い日が続き、昨日は雪も降っていたから、客は来ないだろうと、すっかり油断していたのだ。だからなのか、慌てて振り返つて客に愛想良く笑いかけようとして、転びそうになつた。持つていた荷物は転がり、自分自身も床に体を打ち付ける。そう思つたのに、そうならない。

何かがすばやく床と多紀の間に滑り込んできて、衝撃を和らげたのだ。

自分を抱え込んでいる、この感触は間違いなく人を見たことのある客の一人。しかも、

いつも、零と一人で話のネタにしている無口な客だ。

体格がいいし、鍛えているとは思つていたが、想像以上に、男の体は硬かつた。

厚い上着のせいだけではなく、かなり中身はがっかり系とみた。考えてみれば、触れたことがあるのは、男の指先だけなのだ。

今、その指先は、手袋に包まれて見えない。

そのことを何故か残念だと思い、慌ててその考えを振り払う。そもそも、こんなふうに呆けたように男の上にのつたままなのは、はしたないことだ。男にしても迷惑だらう。

そう思い至つた時、男が身じろぎした。

「あ、ありがとうございます」

慌てて男から体を離し立ち上がると、頭を下げる。男の方も、ゆっくりと身を起こした。

「ごめんなさい。どこか怪我していませんか？」

心配そうに尋ねると男は無言で首を振る。それどころか、反対に気遣うような目差しを向けられてしまった。

「ええと、私は大丈夫でした。本当に助かりました」

多紀がそう言つと、口元を緩め、男は微笑んだ。

反則だ、と多紀は思う。普段、無口であまり感情を出さない人が、いつも顔をすると、妙にかつこよく見えてしまう。

しかも、初めて見る笑顔は、色んな意味でやばかった。前に幼馴染みの柚那が、無愛想な相手が、ふと違う表情になると、意外に胸にくると言つていたが、こういう心境なのだろうか。

いや、しかしここでときめいていても仕方ない。とりあえず、彼は客だ。

そう思つて居住まいを正した多紀だったが、男がじつと自分と見ていることに気がつき、狼狽してしまった。

目が、何をしていたのかと問い合わせている気がする。

気がするだけで、実際は呆れかえつているのかもしぬないが、そんなんふうに解放することにした。でなければ、この妙に重苦しい沈黙に、多紀が耐えられない。

「今日はさすがにお客様が来ないだらうと、片付けをかねた模様替えをしていたんです」

ああ、と溜息にも似た声が、男から聞こえた。

外された視線の先には、うすく曇つた窓がある。はつきりは見えないが、薄暗い景色の中に、白いものが混じつているのがわかつた。昨日からの雪は、まだ降り続けているのだ。

「ただの気分転換のつもりだつたんですけど、つい夢中になつてしまつて」

店の持ち主でもある雲は、居心地さえよければ、内装にも物の置き場所も気にしない。基本的には、多紀の好きなようにしていいとすることになつていて。

多紀自身は、室内や店内の模様替えをするのが楽しいから、雲の許可のもと、気が向けばいろいろといじつているのだ。

「そうか」

男がぐるりとあたりを見回し、感心したように呟いた。

何だろ?と男を見ると、少しだけ考え込んだ後、口を開く。

「いつも居心地がいいと、そう思つていた」

「え、は、はい?」

思わず声が上擦つてしまつていた。まさか、この人がこんなことを言つとは思わなかつた。むしろ、内装とか雰囲気とかには興味がない気がしていたのだ。

やはり人は見た目ではわからない。

それでも、誉められたことは嬉しかつた。照れくさくはあるが、普段、そういうことを言つてくれる人はいないのだ。今までここに来た客たちも、気が付いていても面と向かつて何かを口にすることはなかつた。

「……ありがとうございます」

小さくお礼を言つと、男は表情を緩めたまま頷いてくれた。

「ええと、今日もいつもの品でいいですか? 前来られてからそれほど日にちがあいていませんけれど、もしかして足りませんでした?」

照れ隠しもあつて、多紀は男から目を逸らすと、店員らしくそう言つた。

「いや」

だが、多紀の質問に、男は静かにそれだけ告げる。

しばらくの沈黙のあと、言葉がさすがに足りないと思つたのか、再び口を開いた。

「量は十分だつた。ただ、しばらく遠出をしなければならなくなつたので」

そこで、男は言葉を切つたが、恐らく続くのは『遠出するぶんの追加が欲しい』ということだろ? 密としてやつてくる男との付き合いは、これでも結構長いのだ。雰囲気や視線、表情などで、なんとなく言つたことを当てるこつは出来る。たまに間違えるのは、ご愛敬だ。

それよりも、多紀が驚いたのは、男には珍しくくらいにたくさん

の言葉を聞いたことだ。『こんなに男の声を聞いたのは、初めてではないだろうか。

しかも、男は、『だが、その前に』と、さらに呟いた。

何のことと言つてゐるのかと思つて男を見ていると、彼はそのまま、床の上の荷物を拾い上げると、『ビニく置けばいいのか』と尋ねてきたのだ。

「あ、いえ。そのあたりに投げておいてもらつて、全然かまわないです」

元々、模様替えは一人でやるつもりだつたし、普段から手伝つてもらつ男手などないのから、少しくらいの力仕事は平氣である。それに、客に手伝つてもらつわけにはいかない。

「女性一人で模様替えは大変だろ?」

「だ、駄目ですよ。お客様なんですから」

男の手から、荷物を取り返そつと多紀は手を伸ばしたが、あつさりとかわされてしまった。

「いつも、この店には世話になつてゐる。それに、あなたのする模様替えとやらは、楽しそうだ」

何故、そうなるのか。一度くらいなら社交辞令で言つたといつ可能性もあるが、どうやらそうではないようなのだ。

それでも、彼はお客様。

お客様にそんなことはさせられないと食い下がる多紀に、男は再び笑つた。

だから、その笑顔は反則なんですつてば、と言つたいのをぐつと堪える。

「秉さん 店主に怒られてしまします」

さすがにここまで言へば、あきらめてくれるだらう などと いう考えは、甘かつた。

「ならば、一緒に怒られればいい あつさりと男はそういうわけだ。

そういう問題ではないのだ。そう訴えるが、男も引く氣はないら

し
い

「さて、これはどういに置かせいいのかな」「わの強く聞ひざ、御多聞は何んて」

そう強く言われ、結局多紀は折れてしまったのだ。た

「……何やつているんだい、あんたたち上

零が店に現れた時、そこでは一人の男女があちこちに荷物を動かしている真つ最中だった。

「ええと、こちでねむるんで、おひるねにならぬか」

三 伝 て い る

重なった「人の言葉」に、零がなんともいえない微妙な表情を浮かべる。それを見返した多紀の顔は、どこか疲れ切つたものだった。「零さんが言いたいことはわかります。お客様に「んな」とさせ るなんて、駄目だつてこととも」

「なるほど、押し切られたんだね。そうか。お客は意外に人のことを見ているようだね」

多紀は、押しに弱い。

笑顔でも浮かべてお願いされると、押し切られてしまうこともしばしばだ。金銭に関しては厳しいのに、知り合いや、ちょっと親しくなった相手に対するは結構甘くなる。悪意のない純粋なお願いなら尚更だ。

實際、それではなく雲に押し倒されている。

男は何も言わなかつたが、否定しないと「JUN」を見ると、案外零の想像はあたつているのかもしだなかつた。

想像はあたつてゐるのかもしけなかつた。
「秉さん。そういうこと言つている暇が

い。というか、ここは私が手伝うから、模様替えは大丈夫とか、そういう言い切ってくれたら嬉しいんですけど」

嫌だ

「面倒だし、だいたい、私が手伝うと邪魔になると思つよ。物を壊
雲はあつたり言い切ると、そのまま壁際へと移動する。

してもいいといつなり、やつてみるけどね」

「気持ちの問題ですってば。本当に手伝うかどうかは別な話です」
その時、室内に響いたのは、小さな笑い声だった。零でも多紀でもないそれは、男のものだ。

わずかに口元を緩めた男が、一人を見て笑つたのだ。

多紀は、さきほど笑顔を見たが、零は初めてである。少しだけ驚いたような顔をしたが、すぐにそれは人の悪そうな表情に変わった。

「いやはや、想像以上に面白い客だね」

なにが零を喜ばせているのか、最近では一番の機嫌の良さだ。今朝までは、寒いと文句を言つて不機嫌そうにしていたのに。

「面白いものを見せてもらつたし、そうだね。今日はみんなで模様替えつてことにしよう」

壁際から多紀の側に移動した零の手には、いつのまにかハタキが握られている。

普段、絶対に触つたりしないものだから、持ち方が変だと指摘したいのに、多紀には言えなかつた。不気味すぎて。

「ほら、多紀。あんたが指示ださないと、進まないだろ」「はあ」

期待するよつに零と男に見つめられ、多紀は肩を落とした。

ただの、気分転換の模様替えだつたはずなのに、どうしてこんなことになつたのか。

多紀は、今日何度目かの愚痴を、心の中だけで呴いた。

結局、あれこれ指示を出すことになつてしまつた多紀だが、模様替えは思つたよりも早く終わつてしまつた。

多紀一人では、夕方までかかつていたはずだ。

零はともかく、こちらのお願い通りに丁寧に片付けを手伝つてくれた男のおかげだらう。

「ありがとうございました。あの、お茶でも如何ですか?」

あ紀が、手伝つてもうらつたお礼も兼ねてと思つと残念そつな顔をされてしまつ。

「いや、そろそろ戻らねばならぬ」

「あ、もしかして、やつぱりお時間がなかつたんぢやないんですか」
押し切られてつい甘えてしまつたが、魔女の店がある森は、大きな街道から少しづれた場所にある。一番近い村はすぐそこなので、遠くからやつてくる客の中には、その宿で一泊するものもいるくらいだ。半日も馬を走らせれば、大きな街につくから、そちらに宿を取るというものも多い。

だが、この男は、いつも宿には泊まつていなし、馬や馬車をどこかに預けている様子もない。

どうやつて村までやつてくるのだろう。

妙なことが気になつてしまつたが、なんとなく聞きひらこものが
ある。そういうことは、なるべくこちらから尋ねない方がいいとい
うのは、魔女の店に来るものの殆どが訳ありだからだ。

「夕方までに戻ればいいから

「ひらが氣を使わずにすむようになつたことかもしれないが、一
応、安心する。もし本当に忙しいのならば、男はきつとそういうだ
ろつ氣もしたからだ。

「すぐに、品物を準備します」

必要な数を確認しながら、急いで商品を取り出す。いつもよりも
多い量は、やはり遠出とやらと関係あるのだろう。

男は、いつものように丁寧にその品物を確かめ、いつもと回りこ
きつりと金額ぶんだけの金を差しだした。

「今日は楽しかつた。ありがと」

何故お礼を言われたのか。問い合わせると口を開いたが、遮るよう
に男が言葉を続けた。

「次に来るのがいつになるかはわからないが、茶はその時飲ませて
ほしい

「あ、はい

思わず返事をしてしまつと、男がまた口元を緩める。

考えてみれば、男がこれほど表情を変えるのも初めてのことではないだろうか。

いろんな意味で、驚くことばかりだ。

「お待ちしています」

多紀はそう言って頭を下げる。今回は出来なかつたが、次の時のために、とびきりいいお茶を仕入れておこうと思つながら。

そして、男はこつものように『失礼する』と言つて、店を出て行つた。

「なんだ、あの男。意外に話すじゃないか」

男を見送つてから、零は驚きを隠しもしないでそう言つた。

「びっくりしました。口数は多くないですけど、こんなに会話が続いたのは、初めてかもしれない」

新記録です、と多紀も言つ。前回、もっと話が出来たらとは思つてゐたが、ここまでいろいろ会話が出来るとは考へもしなかつたのだ。

偶然とはいへ、模様替えをしていたのがよかつたのかもしねない。

「面白い日でしたよ、今日は。……あ、しまつた」

最後に呴いた声を耳ざとく聞きつけた零が、あまり興味なさそうに尋ねてくる。

「あんたがそんなに悔しそうな顔をするつてことは、お代を間違えたのかい？ それとも、お釣りを渡し忘れたとか」

「違います。あの人、毎回、きつちり金額通りのお金しか渡してこないし」

「だったら、なんだい？ いい男だから、口説いつけたの、し

「そこねたとか」

「なんで、私があの人を口説くんですか」

「そりだつたら、意外に面白いかと思つてさ」

「それ、面白いのは雲さんだけの気がするんですけれど」

実際、そういうことになつたら、何かにつけてからかわれそうだ。

「それなら、何が『しまつた』なんだい？」

「名前ですよ。聞き損ねました」

絶好の機会だつたのだ。少しだけ、仕事以外の話もしたし、なんとなくいろいろ聞けそうな雰囲気もあつた。

それなのに、それなのにー。せりぎりと、上着の裾を握り締める

と、多紀は唸る。

「すゞく悔しい気分です」

そんな心底がっかりした様子の多紀にて、雲は豪快な笑い声を上げたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0728z/>

魔女の小さな森

2011年12月19日17時47分発行